

メロディーによる索引の改善に関する考察*

Notes on Improvement of the Indexing of Musical Themes

小林 真理
Mari Kobayashi

Résumé

Whatever their forms may be, and whatever they are concerned with, informations should be stored and retrieved in a way most suited to their specific attributes by their subject or keywords, etc. In this respect, musical notes are rarely indexed by their major attribute, "melodies". Instead, they are usually indexed only by their titles, names of composer, ages of composition, etc. Through a series of surveys made by sending questionair, it was revealed that there are a great need for developing "thematic indexes". But it is commonly believed that there are no ways of locating musical compositions unless their titles or the names of composer are known.

This paper evaluates some of the existing thematical indices and introduces some ideas towards systematical indexing of musical themes.

はじめに

I. 楽譜の索引

- A. 索引の定義
- B. 楽譜の索引
- C. 楽譜を検索する際の現状

II. アンケート調査の結果と考察

- A. 調査の概要
- B. 回答結果の分析

III. 楽曲主題を含む索引

- A. テーマ・カタログ
- B. メロディーによる索引の例：その1
- C. メロディーによる索引の例：その2

* 本論文は昭和55年度慶應義塾大学文学部図書館・情報学科卒業論文に基づくものである。

小林真理：立教大学図書館整理課逐次刊行物係

Mari Kobayashi, Rikkyo University, Main Library.

IV. メロディー索引の改善

おわりに

はじめに

現代の生活において、音楽はもはや、それなしには一日が終わらない程、身近で日常的なものになっている。ラジオ、テレビ、BGM等々、放っておいても音楽の方からこちらへやってくる。こうした状況では、例えば、喫茶店で聴いた曲や、テレビ番組の中で使われた曲のことが知りたくて、人に尋ねたりすることは、誰にでもあることだろう。

ところが、曲名がわかっていれば、どんな曲か知るのは簡単だが、反対に、曲の方だけわかっていても、曲名を知るのには難しい。つまり、作曲者名や曲名がわからないと、なすすべがないのである。うろ覚えのメロディーからでも、曲名を調べることができないだろうか。それには、メロディーをキー(key)とする索引が必要である。この小論は、このような索引が求められていることを明らかにすると共に、その理想像を求め、ひとつの試みである。

I. 楽譜の索引

A. 索引の定義

メロディーによる索引について述べる為には、まず、「索引」という語が示すものを、吟味してみるべきである。

図書館学一般の辞典¹⁾を参照してみると、「index」とは、

- ①人名・地名や、論題に関する図書・叢書中の記述が、巻中のどの頁に出てくるかを示す、(ABC順の)リスト。
- ②専門の主題に関する資料へ参照する、図書館内のカード式リスト。
- ③専門図書館等で、資料を別の観点から編成し、利用に供した、資料案内。
- ④専門図書館における、図書館外部の専門情報源のリスト。
- ⑤索引指。

以上のように、まとめることができる。²⁾ これらのうち、ここで論じる「索引」にあたるのは、①である。そこで、①に関して更に調べてみると、³⁾

①個々の項目に十分な情報を与える箇所を示す、組織的リスト。

②人名・地名や、論題に関する記述の位置を示す、(ABC順の)リスト。

③出版物や文書等の記録に出てくる語・概念の位置を示す、組織的ガイド。

④コレクションの含む項目や、コレクションから引き出される概念を、探し易く並べた、組織的ガイド。

以上のものである。⁴⁾ これらをまとめるならば、索引とは、「書籍、雑誌、辞典などの著作物における主要な内容、事柄を、単一の検索方法によって簡便に引き出せるように、一定の方式に従い、編集したもの」⁵⁾、より抽象化するならば、「対象の中の主要な事項を、その内容と位置を示す為に、一定の方式で並べたもの」といえる。

B. 楽譜の索引

一般に、書誌・索引の類は、論文・本や本の集合を対象とするのが、当然のようにになっている。しかし、索引というものを、「要求と対象とを結ぶ中間媒体」⁶⁾と考えると、要求や対象というものは、本や論文の世界だけに存在するわけではない。

われわれの周囲にあふれている情報は、紙の上の文字を媒体とするものばかりとも、文章やデータで表現されるものとも限らない。もっと多様な媒体があり得るし、様々な形態が、実際にとられている。ところが現在では、その中で、本や論文といった形態だけが、優遇されている。それぞれの情報の形態に適した形式の索引が、必要である。

楽譜という媒体による、楽曲という情報に対しても、要求と対象とを結ぶくふうが、なされるべきである。それは、「対象(楽曲)の中の主要な事項(主題たるメロディー)を、その内容と位置(作曲者・曲名等の情報)を示す為に、一定の方式で並べたもの」でなくてはなるまい。これを、「メロディー索引」と呼ぶことにする。

ところで、音楽という情報を媒介してわれわれに伝えてくれる媒体には、楽譜のほかにも、レコードや生演奏等が考えられる。そこで、その中でも何故、楽譜という媒体を中心に据えて論を進めるのか、はっきりさせておきたい。

まず、この小論では、音楽の中でも“クラシック”と呼ばれる領域を、とりあげることにした。クラシック(純音楽)はまた、“再現芸術”とも言われる。“再現”とは、作曲者の意図の再現であり、それには楽譜という拠り所が不可欠である。演奏者の勝手な編曲や即興は、認められない。音楽学的見地に立つての解釈や校訂にも、楽譜が出発点となる。このように、純音楽の領域における音楽活動は、楽譜から始まり、楽譜に到るのである。生演奏も、レコードも、解釈と再現の一例であり、やはり楽譜なしにはあり得ない。以上のような理由で、音楽という情報の媒体を、楽譜に代表させているわけである。

本論に戻ろう。音楽作品とその楽譜に備わる属性として、Brook は、次のものを挙げている。⁷⁾

- ・ 作曲者
- ・ 曲名
- ・ 作品番号
- ・ 調性
- ・ 楽器編成
- ・ 楽章構成
- ・ 歌詞の冒頭
- ・ 日付
- ・ 献呈
- ・ プレート・ナンバー

これらの事項は、図書でいう“書誌的事項”にあたる。ところが、これらのうちどれも、また、どの組み合わせも、個々の音楽作品を区別したり、同定する際の、絶対的なキー(key)とはなり得ない。例えば、同じ曲名のに調性の異なる数種の写本(楽譜)が残っていたり、反対に、同じ作曲者による、同じ曲名、同じ楽器編成、同じ調性の曲が多数存在する場合があるからである。それ故、音楽作品(及びその楽譜)を、区別あるいは同定(identification)する際には、曲の冒頭の数小節(incipit)を用いるのが最も有効であり、これ以外には頼るに足るkeyはない、というのがBrookの考え方である。⁸⁾

但し、incipitは、それがそのまま曲の重要な主題ではない場合、つまり、冒頭にしばらく序奏があってから、初めて主要なメロディー(主題)が呈示される場合もある。そこでincipitから更に一歩進んで、曲の中の主要なメロディーから、音楽作品に到達できるような索引、“メロディー索引”が、必要になるわけである。

C. 楽譜を検索する際の現状

ところで、実際に楽譜を入手する時には、どのような

アプローチの方法が用意されているだろうか。楽譜を手にするのできる公開の場を例にとり、調べてみる。

1. 楽譜を売る店の例

楽器店等の楽譜売場では、大抵、オーケストラのパート譜等を除く殆どの楽譜は、自由に手に取れるようになっている。売場の棚は、音楽の領域や楽器編成等によって、便宜的に分類・構成されている。また、それぞれの分類の下では、作曲者名のアルファベット順に、楽譜を並べている。利用者は、求める曲の楽器編成と作曲者を知っていれば、求める楽譜にかなり近づける。

2. 楽譜を所蔵している資料館の例

ここでは、民音音楽資料館を例に挙げる。この資料館は閉架方式であり、楽譜を探す時には、カード目録によって必要な項目を用紙に記入し、請求する。

楽譜のカード目録は、2種類用意されている。個々のカードには、作曲者・曲名・作品・番号・調性・出版事項・対照事項等の情報が記載されている。一つのファイルは、作曲者名と曲名のどちらからでも引ける辞書体目録であり、もう一つのファイルは、楽器編成に基づく“楽譜分類表”によって配列している。各分類の下では、やはり作曲者名の順に配列している。つまり、利用者は、作曲者名・曲名・楽器編成からのアプローチが、それぞれ可能である。

以上2つの例からわかるように、楽譜を入手するには、図書でいう“書誌的事項”にあたるものがわかっていないと難しい、というのが現状である。

II. アンケート調査の結果と考察

音楽に関わっている人々、特に音楽を演奏することに携わる人は、楽譜を探すために、どんな方法をとっているのだろうか。メロディーからのアプローチに対して、どんな意識を持っているのだろうか。これらのことを知るために、アンケート調査を企画した。(尚、使用した調査票とその結果は、付録として後掲する。)

A. 調査の概要

この調査は、普段から音楽と密接なつながりがあり、楽譜を探す機会の多い人に尋ねなければ意味がない。そこで、在京の各大学でオーケストラに所属している学生と、音楽、殊に作曲を専門に学んでいる学生とを中心とし、調査への協力をお願いした。

調査の方法としては、主に、対象となる人に直接会って、記入をお願いした。それができない場合は、郵送に

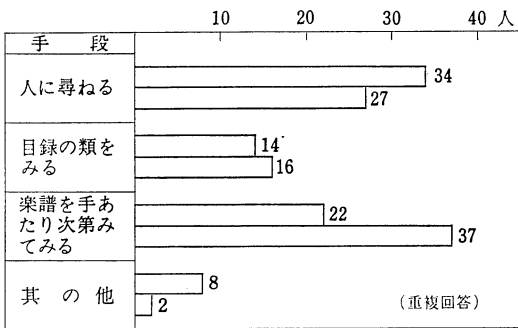
よった。その結果、全部で78人から回答が得られ、回収率は約8割であった。

B. 回答結果の分析

楽譜を手に入れようとする時、問題となるのは、求める楽譜に関してどんな情報を持っているかである。“書誌的事項”にあたるものが予めわかっているならば、求めるものは無理なく探せる。しかし実際には、それがはっきりわからない場合も多い。更に別の観点にたてば、楽譜を求める際のパターンとして、2つの場合が考えられる。一つは、“〇〇の作曲した△△△という曲”という具合に、求めるものが予めはっきりしている場合。もう一つは、“チェロとビオラの二重奏曲で、技術的に容易なもの”という具合に、ある条件にあてはまる曲を求める場合、である。これらの場合に、どのような行動がとられているかをみてみよう。

1. 楽譜に関する情報の補完

ここではまず、求めるものは決まっているのに、“書誌的”情報がそろっていない時どうするかを、2通りの場合に分けて尋ねた。曲名はわかっているが作曲者が不明な場合と、作曲者はわかっているが曲名が不明な場合である。特に選択肢を設けず自由に答えてもらった結果をまとめて集計すると、次のようになった(第1図)。



但し、各々の項目で { 上段…作曲者が不明の場合
下段…作品名が不明の場合

第1図 楽譜に関する情報を補う手段

2つの場合を比べてみると、作曲者がわからない場合の方が、探しにくいことがわかる。何故なら、レコード・カタログにしる、楽譜売場にしる、各作品は作曲者の名前の順に並べてあるのが殆どなので、作曲さえわかっているならば、探す範囲が限られてくる。ところが反対に、作曲者がわからないとなると、“おそらくハイドンかヘンデルの曲だろう”などと見当をつけて探さなくて

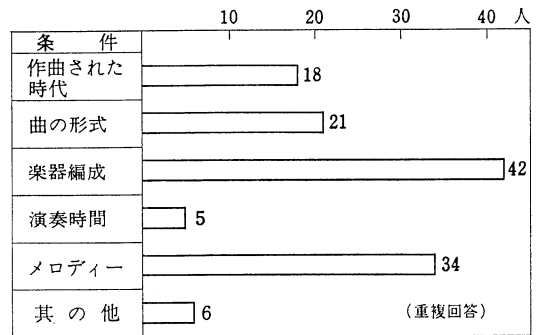
はならない。だから、人に頼る割合が多くなり、片っ端から楽譜をひっぱり出してみる元気も、減退してしまう。また、“その他”という答は、勘で適当に探してみる、といった内容が殆どである。

この設問からは、楽譜に関する情報の不足を補う適切な tool は、存在しないか、存在したとしても使われていない、ということがわかる。

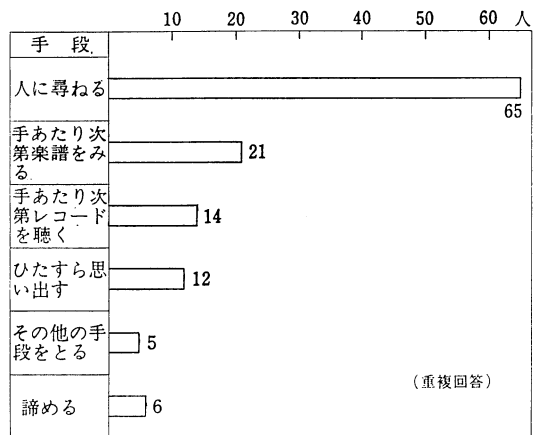
2. 楽曲に対する条件設定

次に、ある条件にあてはまる曲を求める場合、どんな条件を設定することが多いかを尋ねた。設問は、選択肢を用意して、その中からいくつでも選ばせる形式である。これをまとめると、次のようになった(第2図)。

これによると、先に挙げた例のように、楽器編成によって曲を選ぶことが、最も多い。楽器店等の楽譜売場で、楽器編成によって棚を分けているのもうなずけよう。また、メロディーによって選ぶ、という回答も多かつ



第2図 楽曲に対して設定する条件



第3図 メロディー索引を代行する手段

た。これは、メロディー索引の必要性を示唆するデータといえる。

3. メロディーからの検索

それでは、メロディー索引を使うべき状況、すなわち、メロディーは知っているが、誰の何という曲なのかわからないという時、一般にはどんな手段がとられているのだろうか。選択肢を用意して、答えてもらった(第3図)。

答のうちで圧倒的に多いのは、“人に尋ねる”、つまり、音楽に詳しい友人を、“生き字引”ならぬ“生きメロディー索引”として使うのである。それがダメなら、片っ端から楽譜やレコードを引っぱり出してみる。それ

でもダメなら、諦めてしまう。メロディーからのアプローチには、やはり妙手はないものと思われる。

4. メロディー索引への期待

そこで、メロディー索引が存在したら使ってみるかどうか、尋ねてみた。その結果、全体の約4分の3(78人中59人)の人が、“使ってみたい”と答えてくれた。ところで、残りの4分の1の人だが、そのうちの幾人かが余白に書き入れてくれたコメントによると、メロディー索引に対するある種の先入観と不信とが、使ってみたいと“思わない”と答えさせているようだ。曰く、“そういうもの(メロディー索引)はきっと、本当にはないでしょう。あっても、使いにくいのでは?”、“ただ、メロ

INHALT

Band I.		Band II.	
1. K.Nº 533. <i>Allegro</i> <i>p</i> Pag. 2.	10. K.Nº 284. <i>Allegro</i> <i>f</i> Pag. 149.	11. K.Nº 280. <i>Assai Allegro</i> <i>f</i> Pag. 172.	12. K.Nº 331. <i>Andante grazioso</i> <i>p</i> Pag. 184.
2. K.Nº 330. <i>Allegro moderato</i> <i>mf</i> <i>fp</i> Pag. 22.	13. K.Nº 576. <i>Allegro</i> <i>f</i> <i>mf</i> Pag. 202.	14. K.Nº 283. <i>Allegro</i> <i>p</i> <i>fp</i> Pag. 218.	15. K.Nº 545. <i>Allegro</i> <i>dolce</i> <i>fp</i> Pag. 232.
3. K.Nº 311. <i>Allegro con spirito</i> <i>f</i> <i>p</i> Pag. 36.	16. K.Nº 279. <i>Allegro</i> <i>f</i> Pag. 242.	17. K.Nº 281. <i>Allegro moderato</i> <i>f</i> Pag. 254.	18. K.Nº 475. <i>Adagio</i> <i>f</i> <i>p</i> Pag. 270.
4. K.Nº 333. <i>Allegro</i> <i>mf</i> Pag. 54.	19. K.Nº 570. <i>Allegro</i> <i>p</i> Pag. 297.	19. K.Nº 457. <i>Molto Allegro</i> <i>f</i> <i>p</i> Pag. 280.	
5. K.S. 627. <i>Allegro</i> <i>f</i> <i>dolce</i> Pag. 74.			
6. K.Nº 332. <i>Allegro</i> <i>p</i> <i>fp</i> Pag. 83.			
7. K.Nº 310. <i>Allegro maestoso</i> <i>f</i> Pag. 103.			
8. K.Nº 309. <i>Allegro con spirito</i> <i>f</i> <i>p</i> Pag. 122.			
9. K.Nº 282. <i>Adagio</i> <i>mf</i> <i>p</i> Pag. 141.			

第4図 テーマ・カタログの例⁹⁾

ディーを羅列しただけでは、あまり利用する機会・価値がない”、“機能的にロスが多い”……等々。裏を返せば、使い易く、機能的に組織されたリストであれば、メロディー索引の需要は大きいといえる。

III. 楽曲主題を含む索引

第II章で明らかにされたように、メロディー索引は、確かに求められている。しかし現実には、その要求が満たされているとは言い難い。この章では、現存する楽譜のための tool のうち、メロディー索引に到る道を成すと思われるものについて述べる。

A. テーマ・カタログ

テーマ・カタログとは、incipit あるいはテーマを、何らかの順序によって組織した、索引・表・辞書等をいう。第I章でも触れた通り、音楽作品を一意に同定するには、音楽作品の持つ多くの属性のうち、どれをとっても不十分である。そこで、identification の拠り所として、テーマ・カタログが使われてきた。また、音楽学的研究には欠かせない資料である。

テーマ・カタログの、最も一般的な例は、作品集の目次として掲げられている、incipit index であろう（第

4図）。曲名や作品番号、調性等だけでは、各々の作品がイメージしにくいことから、目次としての incipit は大変有効である。しかし、テーマ・カタログにおいては、ある曲の“書誌的事項”から incipit への一方通行しかできない。“書誌的事項”によって組織されたリストであって、メロディー (incipit) 自身によるリストではないからである。

B. メロディーによる索引の例：その1

この節では、テーマのメロディーラインから検索できる、特殊なテーマ・カタログを紹介する。Payne の *Melodic index to the works of J.S. Bach*¹⁰⁾ である。この本は、J.S. Bach の作品だけを対象とする、テーマ・インデックスである。各曲について、各楽章の主要なテーマと対旋律を、前奏とテーマが異なる場合には、両方を、収録している。

1. 全体の構成

この本は、見出し(目次)にあたる“finding charts”と、本篇である“melodic index”の、2つの部分で構成されている。

まず、“finding charts”について説明しよう。高さの異なる音を4つ並べると、その間隔は3つできる。そ

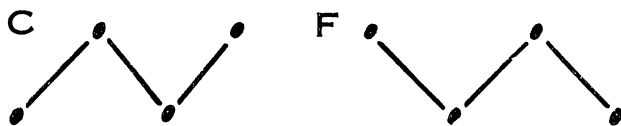
- 音高の変化の方向が、変わらないもの

Themes in which the direction of the line is unbroken:



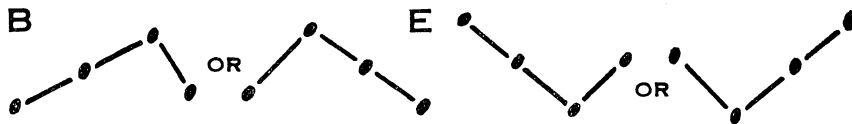
- 音高の変化の方向が、1回変わるもの

Themes in which the direction of the line is broken twice:



- 音高の変化の方向が、2回変わるもの

Themes in which the direction of the line is broken once:



第5図 音高の変化を表わすカテゴリー¹¹⁾

の3つのうち、どれが上がり、どれが下がっているかによって、Payne は 6 つの categorie を設定した(第5図)。テーマの冒頭から、高さの異なる音(同じ高さの音が続く時は、まとめて1つの音とみなす)を、順に並べれば、すべてのテーマは、A～Fの categorie のどれかに属することになる。

次に、これら6つの categorie をそれぞれ、更に細かく分ける。まず、テーマをハ長調、ハ短調に移調して、ドの音で始まるもの、レの音で始まるもの……という具合に、グループ化する。これらはそれぞれ、A-I, A-II……と呼ばれる。各グループの中では更に、音と音との間隔が狭いものから並べてゆく。

こうして、Bach の作品のテーマのすべてのパターンを数えると、842パターンあった。“finding charts”では、この842の譜例が示され、順に番号が付されている。

一方、“melodic index”では、テーマがこの番号順に並べられている。テーマは原調で示されており、その五線譜の前には曲名、後には楽譜のプレート・ナンバーが添えられている。

同じパターン番号の中では、テーマの4つ目以後の音のみをみて、音と音との間隔が狭い順に並べている。それでも順序が決められない場合は、テーマの1番最初の音のみをみて、ドの音で始まるもの、レの音で始まるもの……という順に並べている。

2. 実際の検索例

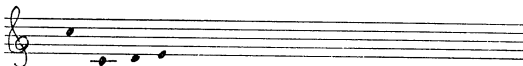
次のようなメロディーの曲について、知りたいとしよう(第6図)。このメロディーは今、ハ長調なので、これをハ長調に直す(第7図)。これから、最初の4つの音をとると、第8図のようになる。これは、A～Fの6



第6図 譜例 I-1



第7図 譜例 I-2



第8図 譜例 I-3

つのカテゴリのうち、Eに相当する(第5図参照)。更に、ドの音で始まっているので、E-Iになる。そこで、“finding charts”のE-Iをみると、“570”の音型が、第8図の音型と同一である(第9図参照)。そこで、次に“melodic index”の“570”をみると、第10図の“570”の部分の上から5番目のテーマが、求めていたメロディーであり、この曲が、クラヴィアの為の“イタリア協奏曲”であることがわかる。

3. 評価

この索引で最も特徴的なのは、言うまでもなく、メロディーの最初の4つの音高が成す音型を、パターン化した点である。4つの音の高さの関係を、折れ線で表わすと、確かに簡略でわかり易い図形になる。しかし、J.S. Bach の作品に限っているとはいえ、総数で3636にもなるというテーマを、最初の4つの音の高さだけで分類・配列する事には、無理があるのではなからうか。Brook も、incipit を identify するには“12音あれば充分”という言い方をしている。¹⁴⁾ とすると、4音ではとても配列し切れないはずである。事実、この索引では、カテゴリーA, Dにおいて、4音より多くの音を使ってパターンを細分している例がある(第11図)。こうしないと、例えば第11図の“10”～“17”を1つのパターンとしてまとめてしまうと、そこに含まれるテーマの数は、107にもなってしまう。といっても、5音以上をとって折れ線にしたのでは、カテゴリー分けが複雑になってしまう。折れ線にするというやり方自体に、無理があるのではなからうか。

もう一つ、無理があると思われるのは、調性に関するものである。この索引では、調べたいメロディーをハ調(ハ長調・ハ短調)に直してから検索しなくてはならない。しかし、Bach の作品には、長調でも短調でもない教会旋法によるものも多い。近代的な調性の感じられない短いモチーフも、曲の重要なポイントになっていることがある。調性には関わりなく検索できる方が、望ましいと考えられる。

C. メロディーによる索引の例：その2

前節では、4つの音の成すメロディーラインに着目した索引を紹介したが、この節では、4つ以上の音を使って調べる索引を紹介する。Barlow と Morgenstern の、*A dictionary of musical themes*¹⁶⁾ である。この本では、古典から近代までの多くの作曲家の、様々な曲を、対象としている。また、incipit に限らず、曲の途中のメロディーも、対旋律も、対象としている。

メロディーによる索引の改善に関する考察



I

515 516 517 518 519
3 min. 13 maj. 2 3 min.

520 521 522 523 524
maj. 2 1 1 3

525 526 527 528 529
1 1 3 2 6

530 531 532 533 534
2 3 1 1 1

535 536 537 538 539
1 1 1 1 1

540 541 542 543 544
42 min. 46 maj. 10 9 1

545 546 547 548 549
1 2 1 11 1

550 551 552 553 554
1 1 7 10 min. 27 maj.

555 556 557 558 559
1 2 1 1 1

560 561 562 563 564
min. maj. 3 3 2

565 566 567 568 569
2 5 1 3 3

570 571 572 573 574
3 1 3 1 1

III (cont'd)

594 595 596 597 598
32 2 2 8 2

599 600 601 602 603
1 1 2 4 1

604 605 606 607 608
1 1 7 1 1

609 610 611 612 613
1 7 1 21 2

614 615 616 617 618
3 6 2 2 1

619 620 621 622 623
29 2 1 1 1

624 625
1 1

IV

626 627
1 1

V

628 629 630 631 632
1 min. 13 maj. 1 4 9

633 634 635 636 637
2 1 2 1 1

638 639 640 641 642
6 4 4 8 3

643 644 645 646 647
1 10 3 2 2

648 649 650 651 652
8 4 4 1 min.

653 654 655 656 657
maj. 1 4 5

658 659 660 661 662
2 1 1 15 min.

663 664 665 666 667
maj. 1 1 1 1 26

II

575 576 577 578
1 min. 10 maj. 1 1

579 580 581 582 583
1 1 1 1 1

III

584 585 586 587 588
10 1 1 4 1

589 590 591 592 593
2 1 1 1 1

第9図 “finding charts” の該当部分¹²⁾

562 *Invento I (vln.&Clavier?)*
Balletto
cont'd) BG 45:173 Bonporti

563 *Cantata 71. Gott ist mein König.*
1. Chor.
trombe EP 809 BG 18:13

Sonata (vln.&cont.)
Vivace NBG 30:4

Suite (vln & Clav.)
Allegro EP 695 BG 9:63

564 *Cantata 107. Was willst du dich betrüben.*
6. Aria (T)
fl. D'rum ich mich ihm EP 1514 BG 23:197

Choral, no. 135.
Nun freut euch, lieben
Weihnachts-Oratorium.
1. Chor.
timp. Jauchzet, frohlocket... EP 232 BG 5:3

Secular cantata. Tönet, ihr Pauken!
1. Chor.
Tönet... EP 1897 BG 34:117

566 *Cantata 96. Herr Christ, der ein'ge Gottes Sohn.*
3. Aria (T)
Ach ziehe die se-le EP 853a BG 22:175

Concerto (Italian)(Clavier).
EP 223 BG 3:139

Cantata 74. Wer mich liebet,...
5. Aria (T)
vln. EP 1544 BG 16:129

Cantata 17. Wer Dank opfert, der preisel mich.
1. Chor.
ob. EP 1529 BG 2:201

Cantata 156. Ich steh' mit einem Fuss im Grabe.
4. Aria (A)
ob. Herr, was du willst, soh mir ge-fal-len EP 1020 BG 32:107

Cantata 159. Sehet, wir geh'n hinauf gen Jerusalem.
1. f. Aria (B)
ob. Es ist voll-bracht es ist voll- EP 1334 BG 32:164

568 *Cantata 103. Ihr werdet weinen und heulen.*
1. Chor.
ob. EP 1044 BG 23:69

569 *Partita II (Clavier).*
Rondeau EP 191 BG 3:64

Weihnachts-Oratorium.
41. Aria (T)
vln. Ich will nur dir zu Eh-ren-le (ben) EP 274 BG 5:160

Secular cantata 213. Laast uns sorgen, laas uns wachen.
7. Aria (T)
Auf mei-nen Flügeln EP 1890 BG 34:148

570 *Cantata 169. Gott soll allein mein Herze haben.*
3. Aria (A)
Gott... EP 832a BG 33:181

Suite VI (violoncello).
Courante EP 751 BG 27:191

Cantata 17. Wer Dank opfert, der preisel mich.
vln. Herr, dei-ne Gü-te EP 1531 BG 2:214

[French] suite VI (Clavier).
Courante EP 341 BG 13:121

Concerto (Italian)(Clavier).
Presto EP 225 BG 3:147

571 *Partita I (violin).*
Courante EP 615 BG 2:7:12

572 *Cantata 147. Herz und Mund und Thot und Leben.*
1. Chor.
trombe EP 306 BG 30:193

Choralvorspiel. Wachtet auf, ruft uns.
Bach EP 110

Sinfonia to an unknown cantata.
vln. EP 117 BG 2:1:65

573 *Lukas-Passion.*
10. Aria (S)
Selbst der Bau der Welt er Schüt-tert selbst der Ba-ch EP 45:93 BG 45:93

574 *Cantata 139. Wohl dem, der sich auf seinen Gott.*
2. Aria (T)
cont. EP 1607 BG 28:234

575 *Choralvorspiel. Herr Gott, nun schleuss den Himmel auf.*
EP 686 BG 25:26

576 *Wohl. Clav., v. 2.*
Fuga 21 EP 90 BG 14:184

577 *Matthäus-Passion.*
67. Chor.
Der du den Tempel Gottes zer-brichst, und bau- EP 154 BG 4:224

578 *Motet. Komm, Jesu, komm.*
1. Chor.
Komm, komm, ich will mich für er-ge... (ben) EP 1672 BG 39:114

579 *Cantata 136. Erforsche mich Gott,...*
3. Aria (A)
Denn sel-nes Eisens Drum ver-riech EP 634 BG 23:154

580 *Choralvorspiel. Kyrie, Gott heiliger Geist.*
EP 1003 BG 3:196

581 *Suite (Clavier).*
EP 541 BG 36:14

第 10 図 “melodic index” の該当部分¹³⁾

第11図 細分化されたパターンの例¹⁵⁾

1. 全体の構成

この本は、テーマを示す楽譜の作曲家別リストである“Themes”と、それに対する索引“Notation Index”から成り、巻末には、曲名から引ける索引もある。

“Themes”では、作曲者名の順に、各作品の主なテーマを掲げている。(一作曲家のもとでは、作品名順に配列している。)各テーマは、出てくる楽章が示され、“Themes”全体での通し番号が付されている。

これらのテーマを、ハ調に直して、各音をA~G(ラ~ソ)の文字で表わし、その文字列を辞書と同じABC順に並べたものが、“Notation Index”である。ここでは、文字列の後にそれぞれ、“Themes”の通し番号が対応しており、それによって、求めるテーマに到達する。

2. 実際の検索例

次のようなメロディーが誰の何という曲なのか、知りたいとしよう(第12図)。まず、このメロディーを、ハ

調に直す(第13図)。これを、C(ド)、D(レ)、E(ミ)……の文字で表わすと、“EDCBCDEFG……”となる。この文字列を、“Notation Index”で探すと、“EDCBCDE”の後に、“B1097”とある(第14図)。そこで、“Themes”の“B1097”を探すと、このメロディーは、Berliozの作曲した“Fantastic Symphony(幻想交響曲)”の第2楽章のテーマであることがわかる

第12図 譜例 II-1

第13図 譜例 II-2

570		NOTATION INDEX	
EDC A C G	D279	ED C B C C	S1405
ED C A F D	S255	ED C B C D C B A G A	B864
ED C A F E	B710	ED C B C D C B A G E	S1440
ED C A G A	S1628	ED C B C D C D	C498
ED C A G B	L57	ED C B C D E	B1097
ED C A G C E	C72	ED C B C D G A	H496
ED C A G C E	W99	ED C B C D G E	R6
ED C A G E C	M426	ED C B C A E	S273
ED C A G E D	M23	ED C B C G A	R334
ED C A G E F	G199	ED C B C G E	D46
ED C A G E G C A	T282	ED C B D C	M205
ED C A G E G C E	C245	ED C B G C	E60
ED C A ^b C A ^b	S1039	ED C C A G E F	R59
ED C B A A	D467	ED C C A G E G	D407
ED C B A B A	E69	ED C C B A A	L160
ED C B A B C D C	W121	ED C C B A G	M286
ED C B A B C D E	B801	ED C C B C D E	S696
ED C B A B G	S525	ED C C B C D G	S1454
ED C B A B G [♯]	L254	ED C C C C	L23
ED C B A D	G109	ED C C C D	P180
ED C B A G A B C A	T273	ED C C D D	R258
ED C B A G A B C D	P61 _a	ED C C D E	E103
ED C B A G A B C D	G89	ED C C D E ^b	S612
ED C B A G B	B977	ED C C F E E B ^b	B820
ED C B A G C	J9	ED C C F E E D [♯]	B567
ED C B A G D	S1059	ED C C F E E D [♯]	B563
ED C B A G E B	S1034	ED C C G C	W16
ED C B A G E G	V91	ED C C [♯] D E F	H457
ED C B A G F E D C B	B1589	ED C C [♯] D E G	S718
ED C B A G F E D C C	S137	ED C D B C E	S886
ED C B A G F E D C D	R368	ED C D B C G	H635
ED C B A G F F	S572	ED C D C E	S447
ED C B A G F [♯] F	W140	ED C D C G	N25
ED C B A G F [♯] G A	W126	ED C D D E	S391
ED C B A G F [♯] G E	T136 _b	ED C D E C A	B1792
ED C B A G G F	B1803	ED C D E C G	S403
ED C B A G G G	M303	ED C D E D C E D	G157
ED C B A G [♯]	F98	ED C D E D C D E F	H133
ED C B A [♯] B	C344	ED C D E D E	B544
ED C B B B ^b	L129	ED C D E D F	D343
ED C B C A A D B	T134	ED C D E E	M672
ED C B C A A D E	G104	ED C D E F E B	M3
ED C B C A C	S1091	ED C D E F E D C	C523
ED C B C A G	H255	ED C D E F E D E	M458
ED C B C B A B C D C	F104	ED C D E F F E	M1005
ED C B C B A B C D E	E73	ED C D E F F F	D428
ED C B C B A G	A52	ED C D E F G A G B	B293
		ED C D E F G A G E	L259

第14図 “Notation Index” の該当部分¹⁷⁾

(第15図)。

3. 評 価

この本は、広い範囲の作曲家の作品をとりあげている点で、“メロディー索引”と呼べるものになっている。ただし、前節の Payne のものと同様、メロディーを一旦ハ調に直すことが必要なので、調性のはっきりしない

テーマは扱えない。近・現代に近づくにつれて、楽曲の調性は、不安定・不明確になっている。何調と感じる(考える)かが人によって異なる場合など、頭の中にあるメロディーが、この本の“Notation Index”の中の文字列と対応しないこともある。例えば、次に掲げるのは、Wager の楽劇“トリスタンとイゾルデ”の前奏曲

BERLIOZ


78

B1081—B1100


4th Theme  B1081


5th Theme  B1082

Roman Carnival Overture, Op.9

1st Theme  B1083

2nd Theme  B1084


3rd Theme  B1085

4th Theme  B1086

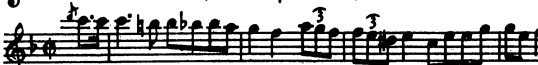
Romeo & Juliet, Overture Op.17

1st Movement Combat, Tumult  B1087

2nd Movement Romeo Alone

1st Theme  B1088

2nd Movement Fête at the Capulets

2nd Theme  B1089


4th Movement Queen Mab Scherzo

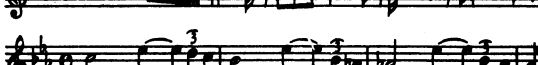
1st Theme, A  B1090


4th Movement 1st Theme, B  B1091

4th Movement 2nd Theme  B1092

Fantastic Symphony, Op.14

1st Movement Reveries, Passions Intro. A  B1093


1st Movement Intro. B  B1094

1st Movement 1st Theme  B1095

1st Movement 2nd Theme  B1096

2nd Movement A Ball

1st Theme  B1097

2nd Movement 2nd Theme  B1098

Scenes in the Country

3rd Movement 1st Theme  B1099

3rd Movement 2nd Theme  B1100

第15図 “Themes” の該当部分¹⁸⁾



第16図 譜例Ⅲ

の、冒頭である(第16図)。このメロディーは、この曲の中でも最も印象的だが、これを聴く時、ある人は、低いレの音を補って、ニ短調と感ずるし、またある人は、調子記号が何もないところから、イ短調と考える。実際、Barlow等は調子記号に基づいて、このメロディーをイ短調として処理している。つまり、このメロディーをニ短調と感じた人は、“Notation Index”には該当するものがなく、何の曲なのか知ることができない。

以上でみてきたように、現在のところ、理想的なメロディー索引は存在しない。では、どうしたら理想に近づけるだろうか。

IV. メロディー索引の改善

メロディー索引のあるべき姿を、もう一度確認してみよう。第I章のBでは、“楽曲の中の主要なメロディーを……一定の方式で並べたもの”とされていた。ところが、“一定の方式”といっても、作曲者名や曲名の順で並んでいたのでは、メロディーからのアプローチはできないことが、第三章のAでわかった。つまり、“一定の方式”とは、メロディー自身が持っている何らかの特性による順序でなくてはならない。メロディー自身の特性によって並べられたリストを、その特性をキー(key)として検索するのであれば、メロディーによるアプローチとはいえないのである。

一方、前章で述べた既存の tool の欠点は、以下のようである。

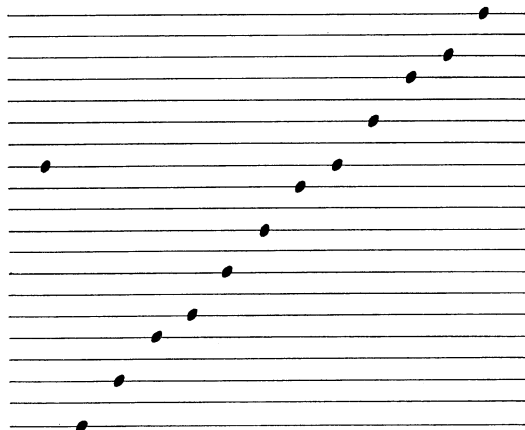
- ・ Payneの索引は、多数のメロディーを扱うことが困難である。
- ・ Payneの索引、Barlow等の辞書は、共に、調性のはっきりしないメロディーは検索できない。

更に、指摘すべき点として、両者共に音の高さだけを考え、音の長さを考慮に入れていないことが挙げられる。

以下、この章では、索引全体の構成と評価には触れずに、一つ一つのメロディーをどのように表わすかという点に絞って、メロディー索引の改善を考えてみたい。メロディー索引とは、メロディー自身の特性によるリストを検索するものであるから、メロディーのどの特性をどのように表わすかが、索引全体の良否をも決める重要な

ポイントとなるのである。

まず、Payneの索引では、索引方式自体に無理があった。メロディーの最初の4つの音をとるだけでは、多数のメロディーを配列するのが困難となるからである。Payneの方式を改善するならば、多数のメロディーを互いに区別できる程度まで、音をとってゆくことが必要となる。また、単に音が上がるか下がるかを表わすだけでなく、音と音との隔たり(音程)を正確に表わすことで、リストとしての精度を向上させることができる。例えば、1半音を等間隔で示した用紙に、前章で掲げた譜例Iを表わせば、第17図のようになる。このようにして図

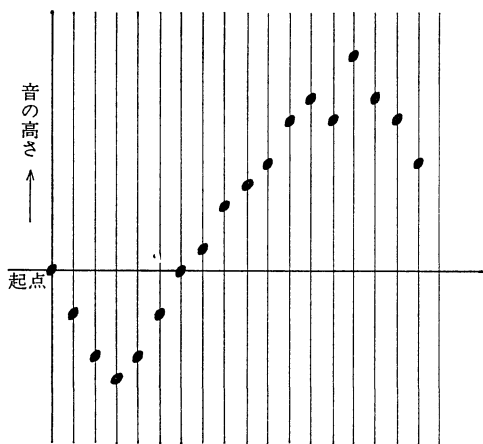


第17図 音程を正確に表わした例

形化したメロディーを、各音間のへだたりの向きと大小によって配列すればよい。

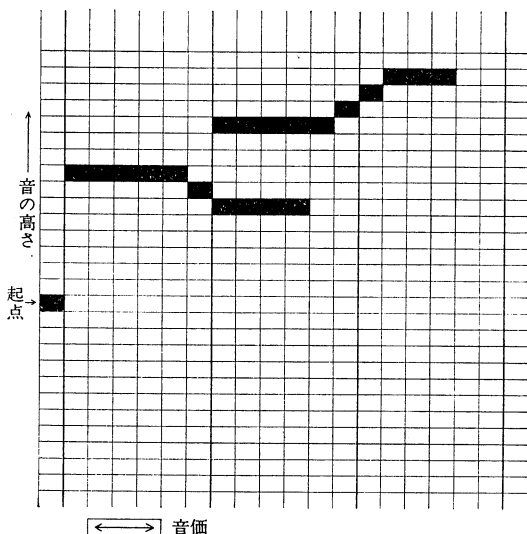
次に、調性の扱い方について述べる。前章でも触れた通り、Payneの索引も、Barlow等の辞書も、調性のはっきりしたメロディーしか扱えなかった。メロディーを一旦ハ調に直してからでないと、検索できないからである。索引の利用者は、メロディーを原調(作曲者が作曲した通りの音の高さ)で思い出すとは限らない。そこで、原調からでなくても検索できるようにする為、すべてのメロディーをハ調に統一して、配列しているのである。しかし、メロディー索引としては、調性が不明確なメロディーも検索できることが望ましい。その為には、メロディーの起点を統一して、その後の音の高さの変化を相対的に把えてゆけばよい。例えば、縦軸に音の高さをとって表わすと、前章の譜例II-1、II-2はいずれも、第18図のようになる。

最後に、音価(リズム)に着目することを提案したい。



第18図 起点を定めてメロディーを表わした例

メロディーを構成する一つ一つの音は、それぞれ高さとも長さを持っている。ところが、既存の索引では、音の高さ（音高）だけに着目し、音の長さ（音価）を考えていない。Brook は、「メロディーを identify するには、最初の12の音（の高さ）があれば充分である。それに、リズム（音の長さ）という要素が加われば、（索引の）精度は飛躍的に高まるだろう。」と指摘している。^{19）}メロディー索引の、リストとしての精度を向上させるには、各音の音価にも着目して、高さとも長さの2次元でメロディーを把握することが、必要であると思われる。その為に



第19図 リズムも含めてメロディーを表わした例

は、第18図の考え方に加えて、横軸に音価をとり、メロディーの動きを表わせればよい。例えば、前章の譜例Ⅲ（第16図）は、第19図ようになる。

ここまで、メロディーを図形で表わす例を掲げてきたが、Barlow 等のように、メロディーを文字で表わすことも、同様に考えられる。図形の縦軸・横軸をそれぞれ文字で示せば、メロディーの各音は座標や積の形で表わせるからである。あるいは、メロディー（楽譜）を直接文字化することもできる。例えば、メロディーを構成するそれぞれの音の高さをアルファベットで、音価を数字で表わすと決めれば、各音は英字・数字の積で表わせる。この方法で、次のメロディー（第20図）を表わすならば、^{20）}



第20図 譜例Ⅳ

“2. F 16 GF EF 4. A 8 G 4. HB 8 G (2 F 8 F) EGE 2 C” のようにすればよい。但し、この場合は、どの調性で思い出しても検索できるようにする為、音高を表わす文字の部分の機械的に入れ換えて、検索に供することが必要になる。

図形と文字のいずれの方法をとるにせよ、メロディー索引では、メロディーの持つ音高と音価の両方を表わして、索引の精度を高めることが望ましい。利用者はこれにより、音高の変化からも、リズムからも、その両者を結びつけたメロディーそのものからも、楽曲を検索することができる。

おわりに

世はまさに、コンピュータ時代である。神戸のポートピアでは、キーボードでメロディーを演奏するとそれが楽譜になって画面に現われる、というしかけが人気を呼んだと聞く。但し、こういったしかけと結びついたメロディー索引が実用化されるのは、まだまだ先のこととなるだろう。われわれがメロディーを思い出す時つきまとうあいまいさ（メロディーを不正確にしか思い出せないこと）が、機械の介入を困難にするからだ。しかし、メロディー索引に対するニーズが存在することがはっきりしたし、それを実現する技術も、われわれは開発できるはずである。メロディー索引の今後の発展を期待したい。

- 1) ここでは、以下に示す文献によった。
- ① Thompson, E. H. *A. L. A. glossary of library terms*. Chicago, ALA, 1943. p. 72.
- ② 植村長三郎. 図書館学・書誌学辞典. 東京, 有隣堂, 1967. p. 177.
- 2) 上の①~④は、引用ではなく、1) で示した文献の内容をまとめたものである。
- 3) 以下の①~④は、次の文献によった。
Harrod, L. H. *The librarians' glossary and reference book*. 4th ed. London, Andre Deutsch, 1977. p. 412-3.
- 4) 上の①~④は、引用ではなく、3) で示した文献の内容をまとめたものである。
- 5) 世界大百科事典. 1974年版. 東京, 平凡社.
- 6) 藤川正信. "索引と分類", 情報管理, vol. 13, no. 6, 1970, p. 331.
- 7) Brook, Barry S. *Thematic catalogues in music*. New York, Pendragon Press, 1972, p. vii.
- 8) *Ibid.*, p. vii-viii.
- 9) モーツァルト ソナタアルバム 2. 東京, 全音楽譜出版社.
- 10) Payne, May de Forest. *Melodic index to the works of Johann Sebastian Bach*. New York, Schirmer, 1938.
- 11) *Ibid.*, p. iii. により作成.
- 12) *Ibid.*, p. xiv.
- 13) *Ibid.*, p. 70.
- 14) Brook, Barry S. "A tale of thematic catalogue," *Notes*, vol. 29, no. 3, 1973, p. 408.
- 15) Payne. *op. cit.*, p. x.
- 16) Barlow, Harold and Morgenstern, Sam. *A dictionary of musical themes*. London, Ernest Benn, 1972.
- 17) *Ibid.*, p. 570.
- 18) *Ibid.*, p. 78.
- 19) Brook, *op. cit.*
- 20) 但しここでは、音の高さを音名（フラットはBを付加）で、音価を音符名の数字（四分音符なら「4」, 符点二分音符なら「2.」）で表わすこととした。また、タイは丸括弧でくくって示した。
- さい。
1. 音楽を生業としている。
 2. 今, 大学で音楽を専門に勉強している。
 3. 昔, 大学で音楽を専門に勉強していた。
 4. 音楽を専門に勉強しているわけではないが, 今, 大学のクラブで音楽をやっている。
 5. 音楽を専門に勉強していたわけではないが, 昔, 大学のクラブで音楽をやっていた。
 6. その他 ()
- ㊦ 次の中で、あなたが普段よくする音楽活動はどれですか。複数になってもかまいません。
1. 作曲・編曲をする。
 2. 指揮をする。
 3. 楽器を演奏する。(楽器名:)
 4. 歌をうたう。
 5. 音楽は聴くだけで自分ではやらない。
 6. その他 ()
- ㊧ あなたが楽譜を探す時、どちらの場合が多いでしょうか。
1. 予め作曲者名や曲名がわかっていて探す。
 2. 作曲者名や曲名は充分にわからないが、他の観点から探す。
- ㊨ 作曲者名や曲名から探すのではない場合、どのような観点から楽譜を探しますか。複数選んでも結構です。
1. 作曲された時代
 2. 曲の形式
 3. 曲の編成 (使用楽器やその数)
 4. 演奏時間
 5. メロディー
 6. その他 ()
- ㊩ ある曲の楽譜が欲しいとします。作曲者だけはわかっているが曲名 (形式名や番号) がわからない、という場合、どうやって探しますか。
- ()
- ㊪ ある曲の楽譜が欲しいとします。曲の形式名・名前だけはわかっているが作曲者がわからない、という場合、どうやって探しますか。
- ()

附 1. 調 査 票

選択肢のある設問には、番号のところを丸で囲んで答えて下さい。カッコ () には自由に御記入下さい。

- ㊦ あなたの年齢・性別をお教え下さい。

() 才

男・女 (←丸で囲む)

- ㊧ 次の中で、あなたにあてはまる項目に丸をつけて下

メロディーによる索引の改善に関する考察

- ㉞ 頭の中に、ふとあるメロディーが浮かんだとします。以前聴いたことのある曲です。けれど誰の何という曲だったか、さっぱり思い出せない。こんな時、あなたならどうしますか。
1. 友人に尋ねる。
 2. 図書館で係の人に尋ねる。
 3. レコード屋の店員に尋ねる。
 4. 楽譜屋の店員に尋ねる。
 5. 片っ端からレコードを聴いてみる。
 6. 片っ端から楽譜をひっくり返してみる。
 7. その他 ()
- ㉟ 作曲者名・曲名から曲そのものを探すと反対に、曲の中のメロディーから作曲者名・曲名を探せる索引が身近にあったら、使ってみたいと思いますか。
1. 思う。
 2. 思わない。
- ㊱ 上のような索引を使うとしたら、どんな場合でしょうか。
- ()
- ㊲ あなたは、Barlow, H. & Morgenstern, S. の “A Dictionary of Musical Themes” を知っていますか。
1. 知っている。
 2. 知らない。
- 「1. 知っている。」とお答えになった方は、㊳以下へどうぞ。
- ㊳ この本を、どういうきっかけで知ったのですか。
- ()
- ㊴ この本を、実際に使ってみたことがありますか。
1. ある。
 2. ない。
- 「1. ある。」とお答えになった方
- ㊵ どういう場合に使ったのか教えてください。
- ()
- ㊶ 期待通りの結果が得られましたか。
1. 得られた。
 2. ほぼ得られた。
 3. 得られなかった。
 4. その他 ()
- ㊷ この本に問題点があるとすれば、どういうところででしょうか。
- ()
- 質問は以上でおわりです。
ご協力ありがとうございました。

附 2. 基本集計結果表

ア	全数	78人	平均年齢	22.0才
	男	55人	“	22.1才
	女	23人	“	21.7才
(以下単位：人)				
イ	①	4	②	17
	③	0	④	42
	⑤	14	⑥	3
ウ	①	19	②	7
	③	36	④	15
	⑤	0	⑥	3
エ	①	68	②	10
オ	①	18	②	21
	③	42	④	5
	⑤	34	⑥	6
カ	人に尋ねる	34	目録をみる	14
	楽譜を手あたり次第にみる	22	その他	8
キ	“	27	“	16
	“	37	“	2
ク	①	59	②	2
	③	4	④	2
	⑤	14	⑥	21
	⑦	23		
ケ	①	59	②	18
ケ'	メロディーだけわかって何の曲か知りたい時	48	その他	1
コ	①	7	②	71
サ	略			
シ	①	1	②	6
	以下略			